



《古写経紹介・その八》

国仏本『摩訶止観 卷第一』について／廣坂 直子・金水 敏

写経の定規／藤本 孝一

《調査日記》

ルーヴァン大学図書館／上杉 智英

《文庫紹介》

身延文庫／南 宏信

《活動記録》

公開シンポジウム

テキストとしての『宝篋印陀羅尼経』とその展開／上杉 智英

今後の予定

平成25年度の予定は以下の通りです。

◇公開研究会◇

5月と11月に、本学春日講堂にて開催予定です。

既刊書

○「Jinhua」17号(非売品)

本書は本学日本古写経研究所のホームページ上からダウンロードできます。バックナンバーを希望される方は下記連絡先にお知らせください。

○日本古写経善本叢刊(非売品)

第1輯「玄應撰一切経音義二十五卷」

第2輯「大乘起信論」

第3輯「金剛寺藏観無量壽経 無量壽経優婆提舍願生偈註卷下」

第4輯「集諸経禮懺儀卷下」

○日本現存八種一切経対照目録(非売品)

本書は本学日本古写経研究所のホームページ上からダウンロードできます。

○佛教文献と文學 日臺共同ワークショップの記録 2007(非売品)

○愛知縣新城市徳連寺古寫經調査報告書(徳連寺の古寫經)(非売品)

○古写経研究の最前線―シンポジウム講演資料集―(非売品)



スタッフ紹介

研究代表者

落合俊典(本学教授)

研究分担者

アレクスフロリン(本学教授)

藤井教公(本学教授)

赤尾栄慶(京都国立博物館学芸部副部長)

(上席研究員)

高田時雄(京都大学人文科学研究所教授)

金水 敏(大阪大学教授)

本井牧子(筑波大学助教)

林寺正俊(北海道大学准教授)

三宅徹誠(元興寺文化財研究所嘱託研究員)

学内研究協力者

今西順吉(本学教授・学長)

津田眞一(本学教授)

木村清孝(本学特任教授)

末木康弘(本学附属図書館副館長)

斉藤達也(本学附属図書館員)

堀伸一郎(本学附属国際仏教学研究所副所長)

山野千恵子

(本学附属日本古写経研究所非常勤研究員)

赤塚祐道・小島裕子・田戸大智

(本学附属日本古写経研究所特任研究員)

その他、学外研究協力者多数。

プロジェクト研究員(PD)

上杉智英・定源(王招国)・南 宏信

プロジェクト研究補助員(RA)

楊 婷婷

(平成24年12月現在)

CONTENTS

Toshinori OCHIAI, Stemmatic Relations Between Manuscripts in East Asian Buddhism	1
Naoko HIROSAKA and Satoshi KINSUI, Introduction to the <i>Mohe zhiguan</i> preserved in the Library of the International College for Postgraduate Buddhist Studies	3
Koichi FUJIMOTO, Traditional Rulers Used in Copying Manuscripts	5
Tomofusa UESUGI, Report on the Library of the Catholic University of Louvain	7
Hironobu MINAMI, Introduction to the Minobu Bunko Collection	8
Tomofusa UESUGI, Report on the Public Symposium 'The Baoqieyin Dhāraṇī-sūtra as a Textual Source and Its Development'	9
Open Lectures	10
Schedule, Publications, and Project Members	11

文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「東アジア仏教写本研究拠点の形成」ニュースレター

Newsletter of the Strategic Research Project for Private Universities Granted by the Ministry of Education of Japan
'Establishment of the Research Centre for East Asian Buddhist Manuscripts'

いとくら 第8号

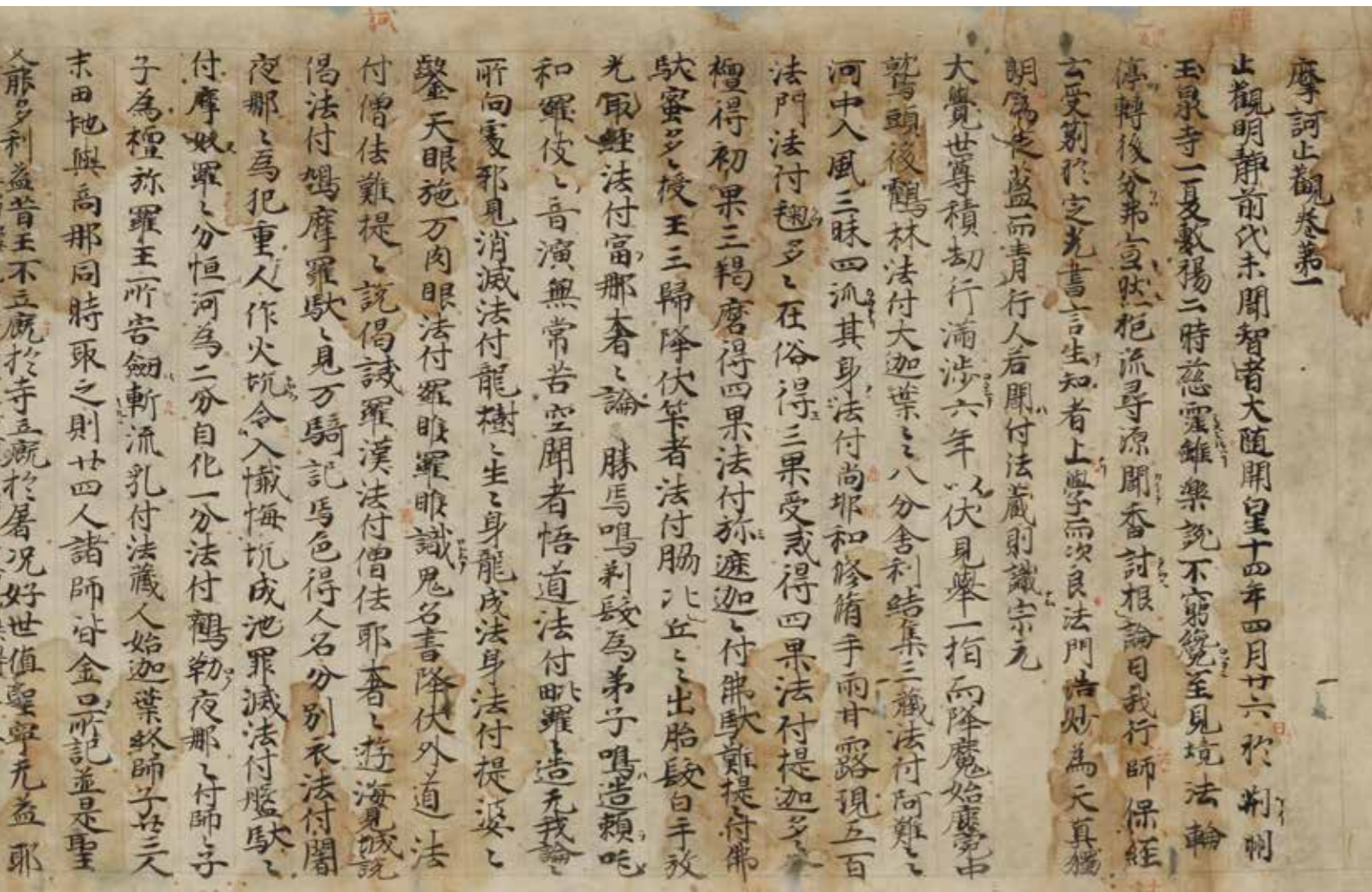
平成24年12月1日発行

編集・発行 国際仏教学大学院大学
日本古写経研究所
〒112-0003 東京都文京区春日2-8-9
URL <http://www.icabs.ac.jp>
E-mail nihonkoshakyo@icabs.ac.jp

印刷 株式会社 高山

ITOKURA Vol.VIII

Published by Research Institute for Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures of the International College for Postgraduate Buddhist Studies
2-8-9 Kasuga, Bunkyo-ku, Tokyo 112-0003, Japan
© Research Institute for Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures of the International College for Postgraduate Buddhist Studies 2012
Printed in Japan at Takayama Co. Ltd., Tokyo



東アジア仏教世界をつなぐ ― 敦煌写本・海印寺写本・奈良平安写本 ―

落合 俊典

日本の古写経についての古い記録は正倉院の文書だと思えますが、それらは大日本古文书に収録されています。⁽¹⁾ その中に天平神護三年二月二十二日の日付がある「一切経本目錄」という文書二点がありますが、前者(続修後集二七七)には「四三〇点の経論が挙げられています。その九五番が「出家人受菩薩戒経二卷」です。この本は敦煌本に見つかった「出家人受菩薩戒法卷第一」(ペリオ二一九六)に比定されています。敦煌本は書写年代が天監十八年(五一九)であり、南朝梁の書風を伝える名品の一つに数えられているものです。

一次の九六番は「在家人布薩法経二卷」です。この經典について今まではよく分かりませんでした。最近京都国立博物館の赤尾栄慶先生と私の調査で判明しました。「在家人布薩法卷第七」(重要文化財・神谷昭男氏蔵)に相当すると思います。九七番の書目は「菩薩羯磨一巻」ですが、これは見つかったりません。

ところで中国仏教史で皇帝菩薩と称される方がいます。それが梁の武帝です。実は敦煌本の奥書には「勅写」と書かれています。書写年代と武帝の治世下が一致しますので古来武帝が僧の慧約から菩薩戒をうけた記録(南史)六、「統高僧伝」六)に鑑みて本写本の史料的价值が喧伝されてきました。しかし、「出家人菩薩戒法」という書名に疑問がもたれていま

した。日本の神谷本も同様でこれは書名に相当しないと考えられます。

一般に經典は品題が付されているものが多いのですが、これが書名に間違えられることがあります。敦煌本も日本古写経本もどうも品題ではないかと見当をつけて調べたところ、唐の道宣の著述「四分律行事鈔」という書物に日本古写経本の一文を引用した箇所がありました。その結果、この書名は「出律儀(十四卷)」と判明したのです。著者は「説あります。梁の武帝と宝唱です。宝唱は『経律異相』などを編纂した著名な高僧ですが、いずれにしても敦煌と日本古写経との両方を見すえていかなければなりません。

以上の仏教写本研究は現在私どもが取り組んでいる文献資料の一部ですが、もう一つだけ例を挙げてみましょう。

先ごろ大須観音真福寺は名古屋博物館で展覧⁽²⁾をいたしました。その時、長らく東京国立博物館に寄託していた国宝「漢書食貨志」を名古屋博物館へと寄託先を変更しました。その折に特別調査をさせていただいたのですが、紙背には僧肇撰とされる幻の書物「阿弥陀経義疏」が書写されていました。その内容は慈恩大師撰とされる「阿弥陀経疏」と同一でした。そもそも本書を慈恩大師撰とすることについては百年前から激論が交わされてきたのですが、古来僧肇の撰述内容が不明

なため研究の前進が緩慢となっていたのです。僧肇撰は仮託の書と確定したことは大きな進歩でした。

さらに驚くことがありました。韓国の海印寺の仏像から白紙に墨書された写本が出てきました。韓国の学者と赤尾栄慶先生、それに筆者との合同調査で十一世紀頃の写本といたしましたが、ここには「阿弥陀経疏」が抄出されていただけでなく、選述者も記録されていたのです。「西京玄法寺行真法師造」とあります。実はこの行真は玄奘三蔵と同時代、あるいは少し後代の学僧であったようです。私は、この人物こそ真の著者だと考えております。

以上のように東アジア仏教写本研究はその名に相応しい展開を見せるようになってきました。ここに挙げたように、パリにある六世紀の敦煌写本と八世紀の日本古写経本の比較研究があり、また韓国の海印寺写本と日本の国宝紙背に書かれた仏教写本の対照研究があります。その他の興味深い仏教写本についても順次報告していきたいと思えます。

(1) 「大日本古文书」巻一(卷二十五。東大史料編纂所。明治三四、昭和一五年。
(2) 「大須観音 いま開かれる、奇跡の文庫(大須観音堂生院、二〇二二) (本学プロジェクト「東アジア仏教写本研究拠点の形成」研究代表者)

目次

《巻頭言》		
東アジア仏教世界をつなぐ	落合 俊典	(1)
― 敦煌写本・海印寺写本・奈良平安写本 ―		
《古写経紹介・その八》		
現存最古写本に附される四種の訓点		
国仏本『摩訶止観 卷第一』について	廣坂 直子・金水 敏	(3)
《特集》		
写経の定規	藤本 孝一	(5)
《調査日記》		
カトリック大学へ寄贈された古写経		
ルーヴァン大学図書館	上杉 智英	(7)
《文庫紹介》		
日蓮の学問態度を今に伝える		
身延文庫	南 宏信	(8)
《活動記録》		
公開シンポジウム		
テキストとしての『宝篋印陀羅尼経』とその展開	上杉 智英	(9)
公開研究会		(10)
今後の予定・既刊書・スタッフ紹介		(11)

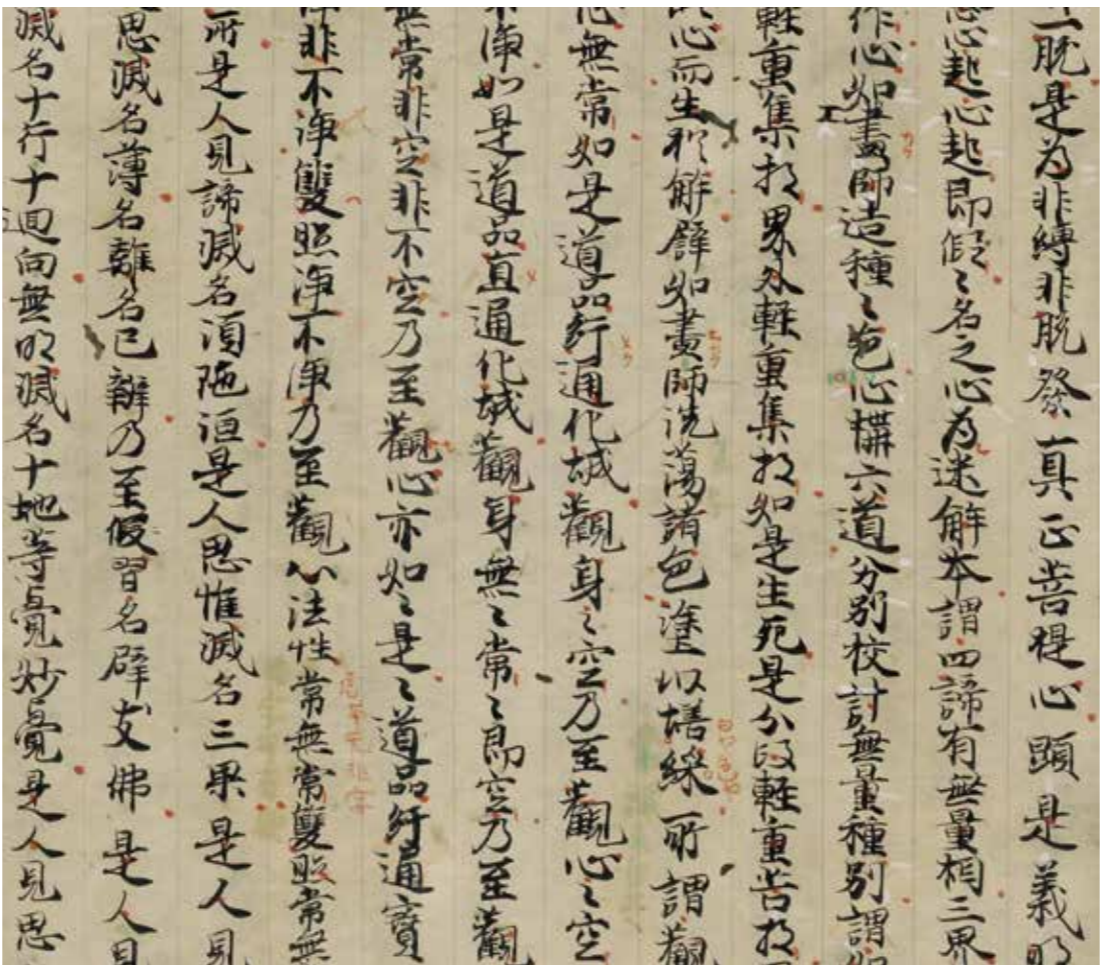
いとくら：私たちが調査している古写経を収める「経蔵」からの造語。「経」を意味するサンスクリット語“sūtra”には「いと」などの意味があり、また「経」には「たていと」という読みがあることから、「経蔵」を「いとくら」と読んでニュースレターのタイトルとしました。

国仏本『摩訶止観 卷第一』について

廣坂直子・金水 敏

国際仏教学大学院大学所蔵(以下、「国仏本」という)『摩訶止観 卷第一』一巻は、奥書を持たないが、書体その他の徴証により本文は平安中後期(一〇～一二世紀)の書写と見られる(赤尾栄慶二〇〇八)。「摩訶止観」は言うまでもなく天台三大部の一つであり、鑑真、最澄、円珍らが将来したことが知られているが、それら遺品は発見されておらず、この国仏本が本邦に現存する最古の写本といふことになる。さらにこの本を特徴づけているのは、朱・白・緑・黒の四種の調点が付けられていることである。特に、朱・白

の二種は巻全体に渡って稠密に付されている。緑点は朱・白とヲト点の配置、仮名字体が同じで、一部分のみの加点である。黒は仮名点で巻頭部のみに付されている。本書の調点については、築島裕『平安時代語新論』(一九六九)に「摩訶止観 卷第一・五・九 三卷 酒井宇吉氏・石山寺舊藏」として紹介され、「長保頃の加點。第五群點は一般に壺内の星點が少いのに、この資料は例外的である。」(九二頁)と述べている(長保年間は九九九～一〇〇四)。また築島裕『平安



国仏本『摩訶止観 卷第一』 朱、白、緑の調点が見える。

「専」と「誦」の間には句切り点らしきものが見えるので、白点での新たな読みは「十年専(ら)・誦し」となる。ちなみにこの部分を書写・加点年代がやや下る金剛寺蔵本の『摩訶止観』(一一七四年頃書写、一一七八年加點、赤尾栄慶二〇〇七)に書誌等紹介あり)で見ると、本文では「十一年―専―誦―」と合符が付されるのみであるが、右訓に「専ヲ誦シ」、左訓に「専誦シ」と読み下せる仮名点があり、白点と同様の読みが右訓に採られていることが確認されるのである。

この例①では白点が別訓を示すだけのようにも見えるが、七から八行目にある次の例もご覧いただきたい。

〈例②〉



例②において朱点で得られる読み下し文は「始(め)は鹿苑・中コロは驚頭・後には鶴林に(し)たまひき」であろうと考えられ、一方白点を加えた後の読み下しは「始(め)は鹿苑・中は驚頭・後は鶴林なり」であろうと考えられる。つまり「変更する必要のない朱点は見せ消ちを付けずそのまま生かし、訂正・付加すべき箇所のみ白を加えている」と考えられるのである。

全体に渡ってこのルールが厳密に守られているかという点とそういうわけではなく、実際にほっと混沌としていて、点一つ一つの意味に頭を悩ませなければならぬ箇所も多く存在するが、基本的にはこのようなルールで二度目の全体に渡る訓読が記録されたのではないかと考えている。

金剛寺蔵本のこの箇所を読みは「始(め)ハ鹿苑・中ハ驚頭・後(は)鶴(林ナリ)とあって、やはり白点を加えた方の読みと同様である(金剛寺蔵本との詳細な比較、関係

時代調点本論考 研究篇』(一九九六)では、「加點年代は、朱點・白點・綠點何れも平安時代中後期で同じ頃であるが、ヲト點は夫々、小異があるらしい。朱點と白點とは、壺の内部に「ル」「キ」「リ」「ス」などの星點があり、「レ」「テ」、「ウ」「ネ」、「ク」「メ」、「フ」「ヤ」、「チ」「エ」などの奇異な假名字體を持つ。(中略)奥書はないが、本文が天台三大部の一であることから見ても、恐らく天台宗延暦寺關係の加點であらうと考へられる。」(五〇六～五〇七頁)としている。本書の加点でもっとも注目すべきは、白点であろう。白点は胡粉を水で溶いたものによって付ける。伸びが悪く書きにくい、乾くと拭き取ることができ、また自然に剥落することも多い。平安初期にはよく用いられたが、その後次第に用いられなくなった。同一文献に白点と朱点が付いていれば、一般には白点が古く朱点が新しいことが普通であるが、本書では平安中期と、白点資料としては比較的遅い上に、白点と朱点はほぼ同時期に付けられている点が興味深い。以下、この朱・白二種の点について、主にその関係を簡単に述べる。

まず朱点は、巻全体に渡って肉眼ではさきりと読み取ることができ、築島裕『平安時代調点本論考 ヲト點圖 假名字體表』(一九八六)掲載の点図及び字体表を使って読み下すことが可能である。ヲト点・仮名点以外にも、声点や反切注、義注、異本注記などが記されている。

一方、白点は、巻首にあつては剥落により見えにくくなっているが、中ほどに進むにつれ肉眼でもある程度見えるようになってくる。実見調査では室内を薄暗くし、LEDライトで反性の検討は今後の課題である)。

全体的に朱白の読み下し文を比較してみると、大方において白によるものの方が今日行われている読みに近い傾向がある。この結果から想像できることは、朱点による読み下しの後、より正確な読み下しを施した別本による校合が行われた可能性があるということではないだろうか。実際、異本注記として「云云字有唐本」「三二六行目・朱」「唐本無而字」「四一五行目・朱」「或本無經字」「四一八行目・緑)のように「唐本」や「或本」と呼ばれる別本を参照した跡がいくつも見受けられ、本文校合を行ったことは確かであるから、それに調点が付されていた可能性もあるだろう。

前述のごとく、「摩訶止観」は『法華玄義』『法華文句』と並んで天台三大部と称される根本聖教の一であり、日本へも鑑真和尚(六八七～七六三)をはじめとして、最澄(七六六～八二二)、円珍(八一四～八九一)による将来が確認されている。そしてその影響力は仏教界のみにとどまらず、『源氏物語』など日本文化にも広がった。国仏本が書写、訓読された当時、幾本かの将来本や写本が既に存在し、夫々訓読が行われていたことは間違いない。

現在ではこの国仏本が本邦最古のものであるため、本文や調点のルーツをこれ以上遡ることは困難であるが、調点等の書き込みを詳細に見ることによって、『摩訶止観』の訓読史について明らかにできることがさまざまあるものと期待できる。

射させながら確認作業を行った。このようにすると肉眼では見落としてしまうような薄くなつてしまった点もかなり見やすくなる(この方法は月本雅幸先生のご教授による)。

白点についても朱点同様、様々な情報が得られる他、特に珍しいのはヲト点の線点とは表情を異にする多数の細めの線が付されていることである。ヲト点でもなく、仮名でもない白線が朱点から伸びているのが何カ所も確認でき、このことから国仏本では朱点が白点に先んじて付されたことが分かる。

解説作業を進めていくと、これらの白線はどうか「見せ消ち」である可能性が高い。つまり朱点を用いて一旦読み下されたテキストを、朱点と同パターン(ヲト点の配置、仮名字体がほぼ同じ)の白点によって、訂正や新たな情報を加えながら読み直していると解釈することができるのである。本文三十行目二丁目から五丁目「十年専誦」の部分为例に見てみよう(赤は朱、青は白を表す)。

〈例①〉



まず朱では、「専」字に「に」と「し」、「誦」字に「する」「こと」「を」のヲト点が付されているので、「十年誦することを専(ら)にし」という読み下し文が得られる。次に、白を見ると「専」字に付されている朱のヲト点「に」「し」を見せ消ちにして訓読指示の記号(左中)を付し、「誦」字に朱で付されている「する」「こと」「を」点を見せ消ちにして新たに「し」点を加えている。

《主要参考文献》

- ・赤尾栄慶「天台聖教の古写本―天台三大部とその注釈」(平成一六～一八年度科学研究費補助金基盤研究(A)課題番号一五二〇二〇二 金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究 研究成果報告書(第一分冊)研究代表者 落合俊典、二〇〇七)
- ・赤尾栄慶「国際仏教学大学院大学蔵『摩訶止観』巻第一の書誌学的研究」(『国際シンポジウム 漢訳仏典研究の新时代 講演資料集』国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会、二〇〇八)
- ・築島裕『平安時代語新論』(東京大学出版会一九六九表)『汲古書院』一九八六)
- ・築島裕『平安時代調点本論考 研究篇』(汲古書院、一九九六)

【謝辞】

国仏本『摩訶止観 卷第一』閲覧に当たっては、落合俊典氏はじめ国際仏教学大学院大学関係者の皆様に格別の配慮をいただきました。記して深く感謝いたします。

廣坂直子(研究協力者 京都外国語大学非常勤講師)
金水 敏(研究分担者 大阪大学教授)

ルーヴァン大学図書館

カトリック大学へ寄贈された古写経

二〇一一年七月一日、落合俊典、赤尾栄慶、本井牧子、上杉智英の四名にてベルギー、ルーヴァン・ラ・ヌーヴ（新ルーヴァン市）のルーヴァン・カトリック大学（Université catholique de Louvain (UCL)）図書館所蔵の古写経調査を実施した。

ルーヴァン・カトリック大学は一四二五年創立、ヨーロッパ屈指の歴史を誇るカトリック大学であり、メルカトル図法のゲラルドゥス・メルカトルの母校でもある。同図書館は一九一四年、第一次大戦の戦火によって烏有に帰したが、一九一九年の「ルーヴァン国際支援運動」設立宣言による国際事業の発足により、ベルギー十五万冊、フランス八万冊、イギリス五万五千冊、アメリカ二万七千冊と、各国の図書寄贈、支援のもと復興を遂げた。日本からも一九二四年より一九二六年にかけ、三、二〇二部一三、六八二冊の寄贈がなされ、これは当時、国外最大規模の日本図書コレクションとなった。



UCL人文学部図書館 貴重書室

これらの図書は宮内省図書寮や早稲田大学からの寄贈の他、宮内省、住友家、岩崎家、三井家、古河家、末延家、洪澤家、日本銀行等の寄付金により、関西を中心に収集された（関東大震災後の為）ものに『ルーヴェン大学図書館二寄贈図書目録』によれば、天平写経、神護寺経、葉師寺経、東大寺八幡経、中尊寺経、百万塔陀羅尼、古活字版等の貴重な仏書を含むものであったことが伺える。

これら目録に記載される稀覯書八三部の中、三〇部九五点の仏書を調査対象としたが、現存が確認されたのは一〇部四三点であった。日本より寄贈された図

書は一九四〇年の第二次世界大戦の戦火を免れたとされているが、未確認分の所在は不明である。

一九六〇年代以降、ベルギーではフランス語系住民とオランダ語系住民の対立が高まり、ルーヴァン大学も一九六八年にオランダ語系のルーヴェン・カトリック大学（Katholieke Universiteit Leuven (KU)）とフランス語系のルーヴァン・カトリック大学（UCL）に分裂、UCLはルーヴェン市の南方約三〇km、現在のルーヴァン・ラ・ヌーヴへと移転新設された。或いはこの大学分裂に伴う有名な蔵書分配が関与しているのであろうか。

調査した「大般若経」刊本には「濃州賀茂郡少松寺常住」との奥書が記されていた。これを記した者も、よもやベルギーのカトリック大学に蔵されるとは夢想だにできなかったであろう。ただ、そこに込められた尊い仏典を未来へ伝えたいとの願いは、現代の我々と何ら変わらないのではないのでしょうか。

【謝辞】

調査にあたりご高配を賜りましたルーヴェン・カトリック大学 (KU) W.F.Vande Walle 日本学主任教授、並びにUCL 人文学部図書館の皆様へ深く感謝の意を表します。

文庫紹介

身延文庫

身延文庫の創建

身延文庫は山梨県南巨摩郡に在る日蓮宗総本山久遠寺内に設立されており、多数の經典・書籍、聖教・古文書類を所蔵しています。文庫創立の淵源は日蓮（一二三二—八二）の在世時まで遡ります。文永十二年（一二七四）三月、身延山に籠った日蓮は、学問・資力共に有した大檀越曾谷・太田両氏に書状を出しました。「曾谷入道殿許御書」の中で「此ノ大法ヲ弘通セシムルノ法ニハ、必ズ一代ノ聖教ヲ安置シ、八宗ノ章疏ヲ習学スベシ」（原漢文）といい、自身が所持する聖教の散失、文字の脱落、謬語、損朽を防ぐため、保存と更なる蒐集・拡充を依頼しています（『昭和定本日蓮聖人遺文』一卷九一〇頁、一九八八年改訂増補版）。

身延文庫の時代区分

以来、歴代法主によって入蔵、整理が現在に至るまで継続されています。室住一妙氏（一九〇四—一八三）は身延文庫の時代区分を久遠寺歴代法主を軸として以下のように大別しています。

- 〈第一期〉日蓮在世時代
 - 〈第二期〉日蓮滅後から寛政年間（二四六—一六六）第十一世日朝入山までの約二百年
 - 〈第三期〉日朝入山から弘治年間（二五五—一五七）日鏡までの四代約百年
 - 〈第四期〉第十五世日叙から第二十七世日鏡に至る約百年
 - 〈第五期〉第二十八世日寛から第七十二世日健（明治七年）までの約二百二十年
 - 〈第六期〉第七十三世日薩から現在まで
- 特に第三期、第十一世日朝（一四二二—一五〇〇）が寺門を経営・教学を振興させます（『行学院日朝上人』、大東出版、一九九九年）。

身延文庫の名称

第四期の第二十六世日暹（一五八六—一六四八）と第二十七世日境（一六〇一—一五九）天海版を入蔵の文庫事業で修補・函の入れ替えを行ったことが『暹師御書籍目録（日境筆）』により知ることができ、「身延文庫／暹師御書籍目録／日境（花押）」とあるのが「身延文庫」の呼称の初出です。多数の蔵書に押されている黒印「身延文庫」（牌型）もおそらくは師の創意にかかるものと見られます。



墨印「身延文庫」(牌型)



宝物館入口

身延文庫の継承

第五期には第三十一世日脱（一六二七—一九八）が東西両蔵の規制を制定し、靈宝類を嚴重に管理しました。惜しむらくは明治八年（一八七五）の大火で堂塔伽藍一四四棟と多くの財宝什器が焼失したのですが、東西両蔵は類焼を免れました。その後身延山復興事業で明治から大正にかけて烏智良氏が整理修補し、江利山義頭氏・室住一妙氏・林是幹氏による継続整理の結果昭和五十一年（一九七六）には『身延山久遠寺身延文庫所蔵文書・絵画目録』が公刊されました。また同年身延山宝物収蔵庫が本堂地下に完成・移転し、所蔵品は宝物館で一般公開もされています。七百年余りに渡り幾度となく目録が作成されてきましたが、近年その集大成として『身延文庫典籍目録』上中下（身延文庫典籍目録編集委員会、二〇〇四年）が公行されました。



調査風景

- 【参考文献】
- ・ヴォルフガング・シヴェルプシュ「図書館炎上二つの世界大戦とルーヴァン大学図書館」（福本義憲訳。叢書・ウニベルシタス三八五、法政大学出版局、一九九二）
 - ・山崎誠「ルーヴァン・ラ・ヌーヴ大学蔵日本書籍目録」（勉誠出版、二〇〇〇）
 - ・W.F.Vande Walle「The Japanese donation to the University of Louvain」(藤善真澄編『東と西の文化交流 関西大学東西学術研究所創立五〇周年記念国際シンポジウム01報告書、関西大学出版部、二〇〇四）
 - ・ルーヴェン国際事業委員会編「ルーヴェン国際事業委員会事業成績報告一九二六（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）<[>](http://kindai.ndi.go.jp/info.ndi.jp/info.ndi.jp/pdf/980504>2012/09/10アクセス>
・同右付録乙号「ルーヴェン大学図書館二寄贈図書目録」一九二六（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）<<a href=)
- （上杉智英）

新羅僧義寂撰『無量寿経述記』

最後に身延文庫が蔵する浄土教典籍を紹介いたします。「身延文庫典籍目録」の余宗の部（巻下、三二頁）には作者未詳で「無量寿経述記（断簡）なる書物があり、これが新羅僧義寂撰『無量寿経述記』であると確認しました。これまで逸書とされ、逸文を蒐集した「復元本」しかその内容を知らなかったため、今回の身延文庫本の出現は意義深いことです。（本年度影印・翻刻を本学「善本叢刊第五輯」として刊行予定）。入蔵時期は未詳ながら日蓮宗総本山が貴重な浄土教典籍を蔵していることは「八宗ノ章疏ヲ習学スベシ」という日蓮の学問態度の継承に基づくものと推測されます。

附記

閲覧の機会を賜りました身延文庫の吉村明悦文庫長、渡辺永祥主事に厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

- ・室住一妙「身延文庫略沿革（身延文庫、一九四一年）」
 - ・江利山義頭「身延文庫に就て」（『身延山と私』所収、一九七一年）
 - ・林是晋「身延山の自然と文化財」（『身延山久遠寺史研究』所収、平楽寺書店、一九九三年）
 - ・南安信「新出 義寂撰『無量寿経述記』写本の検討」（『显宗研究』(仏教学レビュー)七、二〇一〇年）
- （南 宏信）

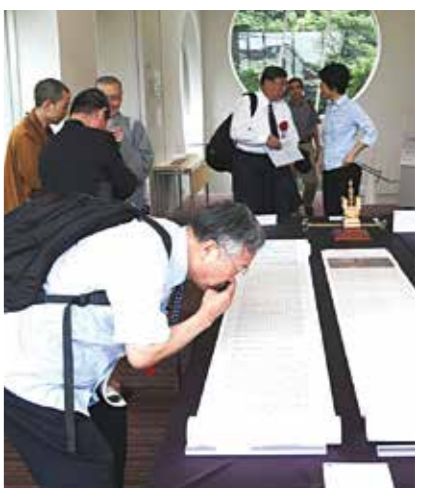
活動記録

公開シンポジウム

テキストとしての『宝篋印陀羅尼経』とその展開

上杉 智英

二〇二二年七月二二日、本学春日講堂において、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)「金剛寺所蔵典籍の集約的調査と研究―聖教の形成と伝播把握を基軸として」(研究代表者・後藤昭雄(成城大学))との共催による公開シンポジウム「テキストとしての『宝篋印陀羅尼経』とその展開」を開催した。



真言宗御室派の古刹、天野山金剛寺(大阪府河内長野市)には一点の『宝篋印陀羅尼経』(一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼経)が伝来している。一つは今様・和歌・消息がしたためられた料紙に金泥にて経文が書写され、今一つは仮名書状を紙背として墨書にて書写されるものであり、共に重要文化財に指定されている。

従来、『宝篋印陀羅尼経』は料紙に見出される和歌や今様に対する文学研究、消息経に対する古筆学、銭弘伽塔を含めた美術史等、個別研究の視座より論じられることが殆どであったが、それら信仰の表出を「展開」と位置付け、その信仰の源泉となる「テキストとしての『宝篋印陀羅尼経』」の本文研究を並行することで、より包括的に『宝篋印陀羅尼経』を巡る宗教文化事象の把握を志向することが本シンポジウム開催の趣旨であり、また共催の所以でもある。発表者及び発表題目は以下の通り(所属、役職等は研究会開催当時のものです)。

公開研究会

昨年度第2回公開研究会、並びに今年度第1回公開研究会について、概要を報告致します(発表者の所属、役職等は研究会開催当時の表記です)。

○平成23年度第2回公開研究会
平成23年11月12日(土)
午後3時〜4時半
於 国際仏教学大学院大学 春日講堂

岡本 一平(恵泉女学園大学非常勤講師)
「金剛寺蔵古写本による『大乘義章』の成立と編纂とテキストについて」
小田 壽典(豊橋創造大学名誉教授)
「偽経本「八陽経」写本からみた仏教文化史の展望」

岡本氏は南北朝末から隋初に活躍した浄影寺慧遠(五二二―五九二)の主著『大乘義章』の院政期写本(全二〇巻中一六巻分)とその配列順序を記した『大乘義章義目』(共に天野山金剛寺蔵)の概要を紹介され、現在の流布本である大正蔵本(底本は延宝二年版本)と構成、配列順序を比較し、更に他の文献にみられる引用を参照することにより、大正蔵本が原テキストの配列順序に近い形態であることを明らかにされた。一方で大正蔵本にみられる撰者号の不自然な点や「四空義」の重複といった問題を解決するものとして金剛寺本の資料価値を認



平成23年度第2回公開研究会の様子

小田氏は中国仏教の影響が及んだ儒教・道教文化圏に広く流布する偽経『仏説天地八陽神呪経』を取り上げ、日本、朝鮮、越南、敦煌、吐魯番の漢語原典、並びにチベット、西夏、モンゴル語訳本等の現存諸本を比較検討し、写本や版本の内容変化に着目することにより、朝鮮本の源流が遼朝仏教にあると推測されること、越南写本と敦煌本との関連、モンゴル語訳にみられるチベット語訳からの借用等、広汎な經典伝播の道筋を明らかにされ、更に敦煌写本の偽作にまで言及された。

【午前の部】

司会 荒木 浩(国際日本文化センター教授)
落合 俊典(本学教授)
「宝篋印陀羅尼経の本文比較とその源流」
赤尾 栄慶(京都国立博物館企画室長・京都大学大学院客員教授)
「文化財的観点からみた金剛寺本宝篋印陀羅尼経」
小島 裕子(本学日本古写経研究所特任研究員)

「金剛寺伝来の宝篋印陀羅尼経と信仰―法舍利としての経典―」
海野 圭介(国文学研究資料館准教授)
「和歌史上における金剛寺本宝篋印陀羅尼経」

【午後の部】

司会 デレアヌ・フロリン(本学教授)
林寺 正俊(北海道大学准教授)
「宝篋印陀羅尼の梵漢比較」
釋 智如(ポモナ大学准教授)
「The architectural and religious functions of the Baoqieyin Dharani Sutra manuscripts at Leifeng pagoda」
李 際寧(中国国家図書館善本特蔵部 研究員)
方 廣錫(上海師範大学教授)
「中国国家図書館蔵『雷峰塔経』版本系統研究」
崔 鈺植(木浦大学校教授)
「韓国における宝篋印陀羅尼経」

○平成24年度第1回公開研究会

平成24年5月19日(土)
午後3時〜4時半
於 国際仏教学大学院大学 春日講堂

楊 婷婷(本学プロジェクト研究補助員(RA))
「興聖寺蔵『出三蔵記集』の系統について」
南 宏信(本学プロジェクト研究員(PD))
「新羅義寂撰『無量寿経述記』の研究―恵谷復元本と身延文庫本―」

楊氏は興聖寺(京都市上京区)に所蔵される平安時代後期写『出三蔵記集』全一五巻に着目され、①開宝蔵本の刊記と千字文号の二つが転写されている経巻(巻一〇)、②開宝蔵本の刊記のみ転写されている経巻(巻三、巻五、巻九、巻一一)、③千字文号のみが転写されている経巻(巻六、巻七、巻八、巻一一、巻一三、巻一四)、④開宝蔵本の刊記



平成24年度第1回公開研究会の様子

南氏は、従来源隆国(一〇〇四―一〇七七)撰『安養集』、了慧道光(一二四三―一三三〇)撰『無量寿経鈔』等にみられる逸文しか確認されていなかった新羅僧義寂(七世紀中―八世紀初)の『無量寿経述記』巻一の写本断簡(身延文庫蔵)を紹介され、従来の逸文に基づく復元本の問題点を指摘されると共に、引用經典の検討により、その成立年代を長安における撰述とするならば『大般若波羅蜜多経』訳出の六六三年より『方広大莊嚴経』訳出の六八三年の二〇年の間、新羅における撰述と考えるならば義寂の師義湘(帰国)の六七一年より『方広大莊嚴経』訳出の六八三年の二二年の間と推測された。

上記発表の後、ディスカッション(司会 木村清孝、鶴見大学学長・本学特任教授)を行い、発表者、聴衆を交え活発な意見交換が行われた。本シンポジウムでの議論を踏まえ、その成果を『善本叢刊』の一冊として刊行する予定である。
当日は五〇名を超える方々に参加をいただき、盛況のうちに終了致しました。沢山のご来臨、誠にありがとうございました。(研究員(PD))



も千字文号も転写されていない経巻(巻一、巻二、巻四、巻一五)に分類し、その藍本が明らかでない③と④を取り上げられ、③に対しては諸刊本大蔵経の千字文号と対照することで開宝蔵本系統であると比定された。④については特に巻一五を取り上げ、高麗初雕本、高麗再雕本、金蔵本、宋本、元本、明本との本文比較により開宝蔵本の転写本であると比定され、開宝蔵本の刊記が転写されていない経巻であっても開宝蔵本を藍本とするものがあることを実証された。